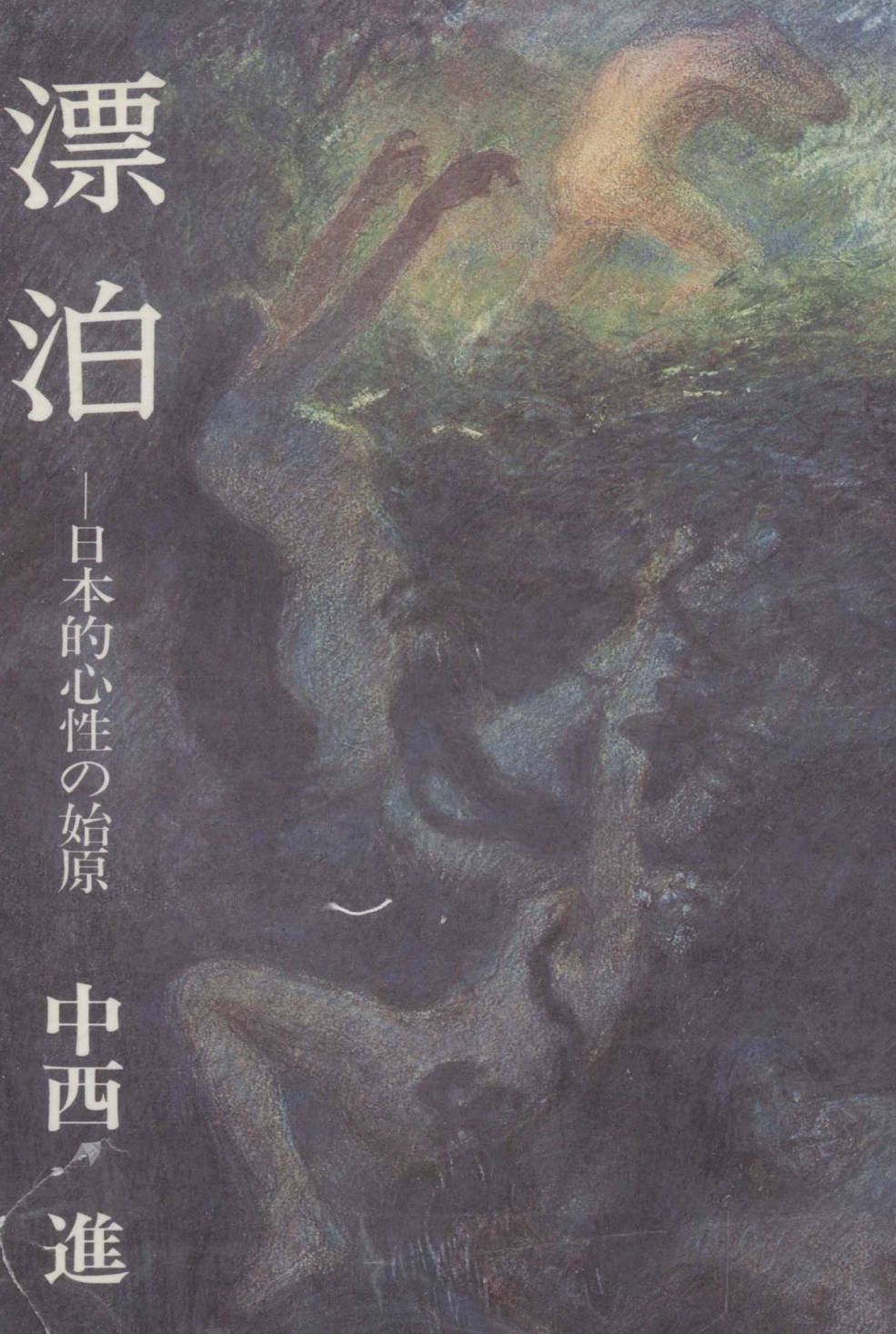


漂泊

— 日本的心性の始原 —

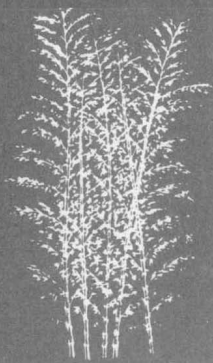
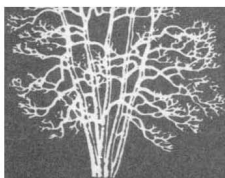
中西進



漂泊

— 日本的心性の始原 —

毎日新聞社



著者略歴

1929年東京生まれ，東京大学文学部卒。
成城大学教授。

著書に「万葉の世界」「天智伝」（いずれも中央公論社）「神々と人間」（講談社）「詩心往還」（河出書房）「柿本人麻呂」（筑摩書房）「万葉の心」「古代十一章」（いずれも毎日新聞社）などがある。

漂泊——日本の心性の始原

昭和五十三年 一月五日 印刷
昭和五十三年 一月十五日 発行

著者 中西 進

編集人 吉田 掟二

発行人 高原 富保

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版 製本 大口製本

目次

はじめに 7

古代人の漂泊 漂泊と定住

原質としての漂泊

死神の彷徨 15

スサノオの追放

死の誕生 死の国土
流離の運命

死神の跳梁 支配者の思想

出雲の通過

海の彼方

不可知の彼方

海辺の彷徨

脱落者と教導者

海神の娘の漂泊

仮象の破綻

隔絶

血の中の母郷思慕

楽土としての海彼

47

東方への憧憬

王権への道程

東方の美地

太陽の末裔たち

光の加護

苦難の旅

外縁をめぐる

大和王地観

伊勢へ

79

国まぎ

.....

111

王地を求める

ヒボコの彷徨

貴公子の死

漂泊の王子

美濃への流離

岩屋の聖少年

光のむすめ

王となる資格

王権からの疎外

.....

143

少年の魔性

母恋いの歌

日の極限へ

配流者

三人の女性

原郷としての愛

外縁の彷徨

愛の逃避行

愛の喪失 175

妻まぎの伝統

大和の外縁

八千矛の求婚

運命の力学

天皇の求婚旅行

愛のもらさ

イワノヒメ物語

醜女の死

天と地の間 207

異形者の漂泊

源流異界から天上異界へ

人界への彷徨

竹をめぐるロマン

湖の天女

月からの漂泊者

羽化登仙

おわりに 241

漂泊——日本的心性の始原

は
じ
め
に

古代人の漂泊

「漂泊」あるいは「放浪」ということばは、やや流行しすぎているといってよからうか。それを扱った書物はけっこうないし、漂泊の歌人西行、放浪の俳人山頭火といった存在は、つねに関心をよんでいる。そして事実、このような和歌や俳句、ひろく詩にたずさわる人々にとって、漂泊の精神なるものがきわめて重要なことは、いうまでもないだろう。生きてゆく上でのたづきとして詩にたずさわらない人々にとっても、漂泊という詩精神は、人間にとってもっとも本質的な自由を保証するものとして、不可欠のものである。「漂泊」や「放浪」を問題とすることが多いという事実は、けっして悪いことではない。

しかし、今ここで述べようとしていることは、中世の歌人西行や元禄^{げんろく}の俳人松尾芭蕉、また、近代の俳人種田山頭火といった個人についての漂泊ではない。また、これを〈詩〉に限定して、特定の詩を論じようとするのでも、詩の性質の一つとしての漂泊を論じようとするのでもない。たしかに〈詩的なもの〉ではあるのだが、もっと広く、もっと深く、日本人の心意の底に沈んでいる漂泊感がある、それを述べてみたい。

そんな漂泊感が、わが国の神話や古代の伝承の根にあると私は思う。そもそも神話や古代伝承をどう捉えるかに、事はかかわっているが、人間の生涯が抜きがたく出生のしかた、幼年期とかかわっているように、あるいは文学者でいえば、往々にして処女作が全作風を代表しているといわれるように、千数百年の日本人の半生（表現をもって以来の）の、その基幹に横たわる何物かは、神話や古代伝承の中にふくまれていたのだといえまいか。少くとも、私にはそう思える。

たしかに、日本神話といっても成立はずっと新しい。「古事記」「日本書紀」などにこれを行うかがうとすれば、もう八世紀になってからのことである。当然、天皇を中心とした支配体制の反映をふくむだろうし、思想的に中国から「中世」の影響をうけている。何よりも官撰の書物なのだから、都合に合わせた修正の筆を蒙^{こうむ}っている。しかし、だからといって神話・伝承のすべてを否定することは、後代性を認めないのと同様に誤りである。神話・伝承は幾つかの後代性の底に、わが古代人の心意をやどし、思想を表明し、哀歓を伝えている。それは、後代性の蒙りを認めれば認めるほど、なお抹消されなかった点において、根強いものだといえることができる。

私はこの古代人の心意を日本人の原体験だと考える。古代人の体験、もちろん心理的体験は、たんに古代人特有のものとしてわれわれから隔絶したものではなくて、むしろ積極的に

われわれを呪縛し、われわれを思考させ行動させる原質となつて、今日にもひきつがれてゐるのではないか。まるで個々人の幼児体験や処女作体験のように。

そう考えると、神話や古代伝承の構造の中に、漂泊性とも呼びうるような特質をもつということは、きわめて大きな事柄と思われる。西行や芭蕉が漂泊から詩を養つたといった個別とは全く次元の違う、日本人の世界観にもつながるような、思想や心情の基本形がこれなのである。われわれ常凡の誰にでもある、ごく基本のものだということになる。たしかにすぐれた詩人たちは、これをきわやかに見詰め表現はしたが、それは彼ら特有のものではなくて、もっぱら常民的な心象が、漂泊の物語を紡ぎ出すのである。

原質としての漂泊

これは、当然、しからば何ゆゑに日本人の原質として漂泊性があるのか、という間に發展するだろう。われわれは農耕民族とよばれ、定住的な生活形態が、大陸の遊牧民族との相違として考えられている。わが国文化の質が、このことから説明されることは、けつして少ない。事を神話に限ってみても、弥生期の稲作文化からこれを理解しようとする態度は、も

はじめに

とても正統的な神話学の方法であった。事実、水稻農耕の影はいろいろな面に見ることができるとすると、漂泊という非定住のあり方は、これと明らかに矛盾する。

また、すでに述べたごとく、日本神話の成立はけつして古くない。天皇家を中心とする体系に組織されている。極論する人は、これを王権中心の神話とのみ見なし、それを唾棄するほどである。たしかに「古事記」の序文に太安万侶が撰進意図として書き記すことを鵜呑みにすれば、これは王権のための神話である。しかれば、支配者に望ましい物語の骨格は、揺るぎない統治体制を賛美するものはずだし、そのよって来たる由来としての、神々の活躍や古代人たちの伝承であるはずだ。漂泊などという、支配者の足元をさらうような思想は、まことにふさわしくないもののはずである。

こう考えてくると漂泊という事柄は、きわめて不調和なものに思えてくるし、むしろそんな特質を指摘するのは、誤りではないかと考えられる。たしかにおかしい。しかし、にもかかわらず漂泊の性格は、厳然として神話・伝承の中に存在している。実はここに、漂泊の問題の大きさがあるのではないか。

ということの第一は、新しい新しいといわれながら、神話や古代伝承は存外にわれわれ日本人の根元に位置する表現体ではないかと、考えられることである。神話や古代伝承を具体的に年代の上に定めることはむづかしい。むしろ時間的に位置づけられないものが神話です

らあるのだから、なおのことむつかしいが、それが何時にせよ、日本という漸層的な統一体ができようとする始原と、神話・伝承の内包する世界とは、存外に密接しているのではないか。

したがって、観念的な支配思想が強く全体を蔽おうとしているにせよ、その皮を剥けば、中身はきわめて豊潤に古代的世界を香らせているといえる。そこに、漂泊を取出すことの大きな意義もあろうではないか。すべてを稲作者や支配者によって裁断してしまうのは、まことに浅はかだと私は思う。稲作を通して村落ができ、やがて中央集権の国家がうみ出され、その過程が神話や古代伝承のでき上がりに随伴しているにしても、なおその根本の、古代人の心象は減びさってはいないのである。

このことは、わが国の古代なるものの特殊性にもよっていよう。すでに述べたように、われわれの古代は、中国の中世と密接に結びついている。こうした特殊な古代は、中世の中に古代を引きずり込み、一方では古代を無時間な先代にしてしまうだろう。いつとはない昔、明確に現在と切り離されていない先代としての古代は、同時に現在でもある。

今問題にしようとしている漂泊とは、こんな古代の中核に坐っているもので、そのゆえに一層、われわれ日本人の原質としてのものだと言うことができるだろう。だからここで神話や古代伝承をとり上げても、それら自身は関心の中心ではない。これらを原質世界と考えるゆえにとり上げ、その特質として漂泊の存在することを、指摘したいのである。

漂泊と定住

ここで、ふれておかねばならないことがある。それはかつて折口信夫氏が「貴種流離」ということをいわれた、そのことについてである。都の貴い御子が鄙に流離してくる。そうした話の構造を指摘することによって、古代伝承に托した人間の心情は、かなりの深層において、いい当てられたことになる。

しかし私は、この発言が事の半分をいい現わしたものであったと思う。流離——今の私のことばでいえば漂泊だが、それは定住とよぶべきものと一對の事柄であって、漂泊と定住とを事柄の上に見定める時、漂泊の意味はより確かに見えてくるはずである。たとえば、その流離は定住すべき地を放たれた流離なのか、定住すべき土地を求めて流離を続けるのかでは、根本的に流離の性質が違う。

流離・漂泊なるものは土地をめぐる事柄だから、これには必ず二つの場所が想定できる。貴種流離でいえば都（およびそれに類似の「貴」の世界）という原の世界があり、流離してきた現在の世界がある。これらの世界をどう認定するかは、漂泊の性格をどう考えるかとい

うことと、裏表の問題である。漂泊に異界・異郷がないことは、あるはずがない。それに対していえば漂泊を解消する原郷とでもよぶべき世界がもう一方にあり、原郷と異郷とにわたって、漂泊がつづけられる。その時、原郷から放たれて異郷に漂泊し、また原郷に戻るのか、そのまま異郷に果てるのか、逆に異郷に生を与えられたゆえに原郷を求めて漂泊するのか、その原郷すらなくて、異郷から異郷へとさまよわなければならぬのか。これらの一々は、大変大きく違っているはずである。

私はこれらのものをもとに、漂泊をモチーフとする伝承を、一々腑分けしてみたい。再言すれば、漂泊と定住という二極における漂泊として考えること、世界を原郷と異郷として考えて漂泊を規定すること、そのことによって〈漂泊〉なるモチーフの正体、この語りの中にこめようとした日本人の心の原質が明らかにするのはないかと考える。

私は右に〈漂泊〉を民族形成の中に、より多く述べたが、もとより、そこから発展した心情を、この語りの中に発見することができる。人間の心情などというものに立ち入ってみれば、これはもう、この列島における生活の仕方などという外側の問題でとどまるはずはないだろう。最初に詩人の例をひいたように、「一所不住」の漂泊は、ほとんど「詩」というのに近い性質のものだから。あるいはまた、人間の命など、生から死へ向かっての漂泊にすぎないとも思えるのだから。